

信頼が育てた美しい心

最初に生まれた男の子が、高熱で知的障害になってしまいました。次に生まれた弟が二歳の時です。ようやく口がきけるようになると、こう言いました。「お兄ちゃんなんてバカじゃないか」。お母さんははっとしました。それだけは言ってほしくない言葉です。叱ろうと考えましたが、思い直しました。

そしてお母さんはその日から、弟が兄に向かって言った言葉を毎日ノートにつけていきました。一年たち二年たち・・・相変わらず弟は「お兄ちゃんのバカ」としか言いません。お母さんはなんべも諦めかけて叱ろうとしましたが、もう少し、もう少しと我慢して、ノートをつけ続けました。

弟が幼稚園に入った年の七夕の日、偶然、近所の子どもや親戚が家に集まりました。興奮したお兄ちゃんが皆の頭をポカポカとぶち始めました。その子をよく知る皆は「やめなさい」と言わずにだまっていました。すると弟が飛び出してきて言ったのです。「お兄ちゃん、ぼくだけぶってちょうだい。ぼく、痛いって言わないよ」・・・これこそお母さんが長いこと待っていた言葉でした。

その晩お母さんはノートに書きました。「ありがとう ありがとう ありがとう ありがとう・・・！」無意識のうちにノートの終わりまで書き連ねてしまいました。

小学校の入学式の日、教室で席が決まりました。弟の隣に小児マヒで左腕の不自由な子が座りました。それを見てお母さんの心は動揺しました。家ではお兄ちゃん、学校ではこの友だちでは、幼い子に精神的負担が大き過ぎるのではないかと思ったからです。家を引っ越して転校させようかとすら思いつめました。でもしばらく様子を見てからにしよう、決心しました。

学校で最初の**体育の時間**のことです。先生は手の不自由な子の**着替え**を手伝いませんでした。その子は生まれて初めてやっと**右手だけ**で体操着に着替えましたが、その時すでに30分も遅れてしまいました。ところが二度目の体育の時間には、その子がちゃんと着替えて、校庭に並んでいたのです。先生は次の体育の前の休み時間に、教室の外から様子をうかがいました。

すると隣の席のあの子が、大急ぎで自分の着替えを済ませると、**着替えの手伝い**を始めたのです。動かない手を体操着の袖に通してやるのは、母親でも結構難しいものです。それを小学校に入ったばかりの子が一生懸命手伝い、そろって校庭に駆け出していったのです。先生は**褒めてやりたい**と思いましたが、心を鬼にして黙っていました。「先生から褒められたから」と、彼の**自発性をこわす結果**になりはしないかと、恐れたからでした。

偶然ながらまた七夕の日の出来事です。教室に持ち込んだ笹に、先生は願いごとを書いた短冊を子どもたちにつけさせました。参観授業の時に先生はその一枚ずつ読んでいきました。「おもち

やがほしい」「自転車がほしい」子どもらしい願いごとが続きます。「かみさま、〇〇くんのうでを、はやくなおしてあげてくださいね」。先生はもう我慢できなくなり、体育の時間のことをお母さん方に話しました。

小児麻痺の子のお母さんは、教室に入ることも出来ず、廊下からそっと参観していました。しかし先生の話聞いて教室に飛び込んで来て、床に座り込み、そのお友だちの首にしがみついて涙を流し、頬ずりしながら叫びました。「ありがとう ありがとう ありがとう ありがとう・・・！」 幼子の心の成長を信じて待ち続けたお母さんと先生。何と素晴らしい方々でしょうか！

(講談社文庫 鈴木健二著「本当に感動したときの言葉」)

5月3日は憲法記念日でした。その前文には「日本国民は、恒久の平和を念願し・・・平和を愛する諸国民の公正と信義を信頼して、われらの安全と生存を保持しようと決意した」「いずれの国家も自国のことのみ専念して他国を無視してはならない」という「普遍的な政治道徳に従うことは、各国の責務であると信ずる」と宣言しています。そして第九条で「戦争や武力は国際紛争を解決する手段としては永久に 放棄する」と規定しています。

利害の対立から武器を手にとり殺し合う紛争・戦争が絶えない世界です。戦力を持たず、周囲の国々の平和を愛する公正と信義にひたすら信頼して、日本の安全と生存を保持しようと決意した平和主義は、非現実的だと言われます。

しかしアジアの人々約 3000 万人の命を奪った戦争をした私たちなのです。もう絶対に戦争の悲劇を繰り返さないで戦後の誰しものが抱いた決意を貫くことこそ、日本国民の責任であり使命ではないでしょうか。幼子の心の成長を信じて待ち続けたお母さんや先生のように、他国の事情を無視せず、平和を愛する諸国民に徹底的に信頼を寄せて、忍耐強く平和を生み出す心を育てていきたいものです。